■研究十二月往来〈204〉

能「屋島」の謎

水原一

舟路をたどって、源平屋島の古戦場に至った諸国一見の旅僧（ワキ、ワキツレ）。日も暮れ果てて、折から見かけた無人の塩家に一夜を過ごそうとする。そこへ塩家の主と思われる老翁が、若い漁夫を伴って帰って来る（シテ、ツレ）。型通りの導入であるが、旅僧はこうして現世から冥界の通路にいざなわれるのである。それは修羅の幽霊能として、特に名曲「屋島」の時空を諷いこむ詞によって運ばれて行く。夜の深まり、その海辺に打寄せる波音。松を払って吹き渡る風の音までが、特別な装置もない簡素な舞台を夜の古戦場となして、霊気を漂わせ、二組の登場人物を覆いつくす。演劇としての「屋島」の美は一気に観客をも包み魅了するのである。

一宿を請う旅僧に、老漁翁は、「余りに見苦しく候ふほどに」と一度は断るが、結局は承諾する。能によく見る〃たゆたひ〃の問答であり、若い漁夫を間に立てての詞の往復が、無駄な手順でありながら、一曲の奥行を見せている。

漁翁は僧の求めるまゝに、いにしえの源平合戦の様態を、若い漁夫と掛け合いで物語って聞かせる。「あまり委しき物語」に旅僧は不審を覚える。漁翁は源義経の幽霊だったのであり、観客の納得と感動はワキ僧に代表されて一曲のより深部へと同化して行く。

こゝに私は一つの疑問を投じてみたい。前場の漁翁は後場では幽霊義経の在りし日の武将の姿を現じるはずである。その前ぶれの手順として、人間界の旅僧に接触する人体となっての漁翁の姿なのであった。それならば、漁翁に随行する若い漁夫のツレとは一体何者なのであろうか。彼は宿を請う旅僧と漁翁の間に詞を取次ぐ。そして漁翁の軍がたりに掛け合いの詞を以て参加する、いわゆるツレなのであるが、面をつけた（つまり化身の）漁翁に立ち添いながら、彼自身は「直面」（素顔）なのである。能の演出の約束から言えば、それは生身の人間なのである。昔の屋島の軍に参加した家来何某でもない姿なのである。一応漁翁と同じ立場にあるという事は言えるだろうが、それを以て漁夫も幽霊だと確かな答を当てるのはためらわれる。

さて「中入り」の間狂言の語りを隔てて後場になると多くの「屋島」（八島）の能ではもうこの若い漁夫は姿を見せない。どこへ去ったのであろうか。しかしそれは多くの上懸り系の能の演出であって、下懸り系の能では前場と同じ小袖・袴の扮装で舞台の正奥にいつの間にか居るのである。だが一言の詞も、片鱗の所作もなく、後見よりもなおひっそりと、しかし端然と正座しているのである。それは上懸り系の〃居ない〃という事と意味的には同じ事である。たゞ確かにそこに彼は〃居る〃のである。

このツレの役がらについては長い間私にとって謎であった。そして次第に分ってきたのは、この意味不明の、影の如きツレによって能の〃答えのない幽冥性〃とでもいうべきものに気付かされたという事であった。

「屋島」の中入には、まことの塩家の主が間狂言として登場する。当然の事ながら、これこそが、疑う余地のない現身の人間である。彼の登場は、不思議な老翁を義経の幽霊かと察し、塩家の一夜に亡魂供養を奨めるという多くの修羅能と同じ役割がある他に、屋島の合戦の一部を独立した語り芸として聞かせる事をする。「那須の語り」「継信最期」「景清鐚引き」の中のどれか一つを語るのである。

結局旅僧に対して、漁翁・漁夫掛け合いの語り、間狂言の語り、そして後シテ義経の霊の在りし日の実演としての語り――という具合に屋島の合戦は重ね重ね語られる事になるのだが、この累層という表現形式こそ能の深秘に関わる事なのである。その中で最も生身の語りがこの「中入」の間狂言であるのだが、

長年屋島に住んでいながら今まで、当の塩家の主は義経やツレの漁夫の霊の出現に出遇った事はないらしい。たまたま一夜訪れた旅僧に、幽霊と接触する資格があったのであり、「諸国一見の旅」とはそういう、古蹟弔問・故霊供養、そして幽霊によって昔の出来事を見聞し得たのであり、この後旅僧はそれをいわば語り部として語り広めて行かねばならない。その最初の報道が今この同時の場での観客に向けて行われていると言えるのである。間狂言よりも生身である観客の私たち――。逆にたどれば、本物の塩家の主がいるのに、塩家の主然と振舞う前シテ、そのまた仮装をかなぐり捨てた後シテの武将義経の幽霊……という曖昧なまゝ幾層にもはたらく〃障壁なき差違〃を知る事が「屋島」の表現の謎を把握することであり、その大きな意味に較べれば上懸りにせよ、下懸りにせよ、若い漁夫の位置づけに当惑する要はなかったのであるが、しかし一旦は当惑してみる事によって、おそらく「屋島」以外の多くの能に対しても次元的陶酔がもたらされるのである。

義経の霊は朦朧としたその構造に乗って、人間界に近づき、また遠のく。最も遠のいた幽霊の姿こそ逆に我々の鼓動を誘う。だが屋島に踊躍乱舞する義経は次第に戦に高潮し、なおも激しく叫ぶ。

今日の修羅の敵は誰そ。なに能登守教経とや。あらものものしや、手並は知りぬ。

思ひぞいづる壇の浦のその船軍……

修羅の戦は見る見る拡大して、長門壇の浦の源平決戦をも呼び起こす。この転調の凄まじさは、昔の戦を眼前に見る如くに恍惚と感情移入に浸っていた観客を覚醒の世界へ突き放す。そこは空と水との海景の世界であった。

敵と見えしは群れゐる鴎。鬨の声と聞こえしは浦風なりけり……

修羅道の義経は消えて行く。その行く先とはどこであるのか。そこはもう人間の届かぬ、ワキ僧にも届かぬ、尚も遠い模糊とした闇冥の奥であろう。

＊　＊

「壇の浦」という地名は屋島にもある。義経がキリに「思ひぞいづる」という壇の浦は屋島の中の海岸なのだ。そこでも能登守との戦はあったのだから――という説がある。そういう知識は私も持っている。しかしそれは文学常識に逆らって、源平史を矮小化する奇説に過ぎぬであろう。一曲の能のキリに託した力感、漁夫の不審さとも連絡するこの曲の深秘、まして壇の浦を導き出すのに「思ひぞいづる」と距離感を以て手繰りよせる修辞などを見れば、冥界を地図の上に求めようとする無意味に気付くはずである。

＊　＊

ツレの漁夫は義経の重さを引き立てる役なのだ、という分り易い観方がある。私も一応同調できる。だが能の文学的問題にかねて関心を深めて来た私の立場として、敢えて一石を投じる次第である。

（駒沢大学名誉教授）